

08年マアジ

単位：数量、1000トン、価格、円/kg

年	数 量				価 格							ムロアジ						
	漁獲	養殖	産地	輸 入	東京			消費支出 生(万円)	在 庫	加工 塩干	産 地	輸 入	東京			漁 産 獲 地		
					生鮮	冷凍	塩干						生鮮	冷凍	塩干		生(円)	
19	169	1.7	92.9	45.0	20.6	0.4	9.6	1,795	34.6	51	188	152	485	415	497	1,750	24.6	15.7
20	170	1.5	95.8	41.6	19.3	0.4	11	1,690	37.1		220	163	520	406	457	1,649	24.6	15.7
%	101	88	103	92	94	105	112	94	107	0	117	107	107	98	92	94	100	100

漁獲量と資源

20年の漁獲量は17万トン前後で、ほぼ前年並みの水準とみられ、平成11年以降の平均20-25万トン台を引続きかなり下回る低水準であった。

本年は主力の東シナ海が好調であったが、近年漁獲が安定していた山陰沿岸の水揚げがやや低調であったため、前年並みの漁獲にとどまった。

主力の東シナ海及び日本海沿岸で主に漁獲される対馬暖流系群の資源量は、1973～1976年の25万～33万トンから1977～1980年の13万～18万トンに減少した後、増加傾向を示し、1993～1998年には、51万～56万トンの高い水準を維持した。1999年以降はそれよりやや低く、2001年には28万トンにまで減少したが、その後増加して、2004年は54万トンであった。2005年以降は減少に転じ、2007年は45万トンであった。再生産成功率は1990～2000年まで変動しながら減少傾向を示したが、2001年に急増した。その後は再び減少傾向にある。親魚量と加入量には正の相関があり、親魚量が少ない年には高い加入量が出現しない傾向がある、いわれている。

また太平洋系群は1986年以降顕著に増大し、1990年代半ばは150千トンから160千トンと高位水準であったが、1996年の162千トンを頂点に減少した。2000年と2001年にはやや増加したが、2002年以降は100千トン前後を推移し、2007年の資源量は85千トンとなっている。2006年の加入尾数は約7億尾と極めて少なく、2007年も約9億尾と少ない値となっている。なお資源を維持するための方策としては漁獲圧の削減が期待されている。

以上のように何れも資源水準は中位であるが減少傾向にあり、親魚量の増加・確保は、資源の安定的確保には極めて重要であるとともに、また当歳魚の漁獲の減少があれば、漁獲量の増加が期待できるとされている。

ムロアジ類

大中型まき網のムロアジ類(マルアジ除く)の資源密度指数は、1997年に比較的高い値を示した後、減少して最近5年間では横ばいである。マルアジ資源密度指数は近年では1996年に高い値を示した後、減少して低い水準にとどまっている。ムロアジ類(マルアジ除く)およびマルアジ資源密度指数の相乗平均値は最近5年間(2003～2007年)で見ると横ばいで、最近30年間で見ると低い水準にとどまっている。

(近年MAX：H2年 10.9万トン)

産地水揚量と価格（49港）

海 域 別 水 揚 量				月 別 漁 獲 量				月 別 価 格 推 移			
海域	19年	20年	前年比	月	19年	20年	前年比	月	19年	20年	前年比
東シナ海	43.1	54.6	127	1	6.5	6.2	95	1	142	167	118
山陰	44.7	35.1	79	2	7.9	5.0	63	2	167	220	132
豊後水道	1.3		0	3	7.3	8.5	116	3	203	169	83
九州東岸	2.6	2.8	108	4	10.6	11.5	108	4	171	227	133
薩南	1.9	2.6	138	5	9.8	13.0	133	5	243	258	106
太平洋	12.1		0	6	10.0	9.7	97	6	215	290	135
その他日本海	4.4		0	7	7.8	11.6	148	7	203	244	120
				8	6.5	7.0	109	8	218	236	108
				9	6.9	7.9	115	9	187	176	94
				10	5.1	6.6	129	10	219	171	78
				11	8.0	5.3	67	11	130	176	135
				12	5.8	3.4	59	12	172	243	141
計	92.1	95.1	103	計	189	189	100	計	189	189	100

20年のマアジの水揚量は、9.6万トンで前年(9.3万トン)をやや上回った。

九州西方海域では、春の盛漁期（4～6月）に久し振りにまとまった漁況で、水揚げも伸び、しかも、秋口から冬場にかけてもコンスタントな水揚げとなり、結果年間水揚げは前年をかなり上回った。

また、山陰沿岸では春の盛漁期（4～6月）の九州とは逆に昨年をやや下回る水揚げに終始し、秋・冬漁も春漁以上に低調な水揚げとなった。その結果、昨年をかなり下回る水揚げとなった。

太平洋側では薩南海域で前年をやや上回ったが、その他の海域では前年並みの漁であった。

魚体は、東シナ海では100g以下のアジが37%(前年25%) (70g以下の豆アジは全体の10%で前年7%)で、本年は小・豆アジの占める割合が高く、昨年より魚体の小さいアジの漁獲が多かった。

山陰沿岸では、依然、魚体の大きいマアジは少なく本年も周年豆アジ（0～1歳魚）主体で推移し、依然型の大きいアジは少なかった。

価格は、220円で水揚げの伸びも少なかったことを反映し引続き前年(188円)を上回った。

輸 入

20年のアジの輸入は、4.2万トンで5～7万トンの近年の範囲を依然やや下回る水準であり、前年(4.5万トン)をやや下回った。

本年は、オランダ1.7万トン(前年:1.3万トン)、ノルウェー0.4万トン(前年:0.81万トン)、アイルランド0.2万トン(前年0.5万トン)で主力のオランダは増加したものの全体的にはヨーロッパ諸国からの輸入がやや減少しているのが特徴。また韓国は0.8万トンで前年(0.5トン)を上回り、台湾は0.2万トン前年(0.2万トン)並みであった。

本年も国内漁が低調であったが、北欧でのアジ価格の2年続きの高騰もあって輸入量も減少した。

価格は、163円で前年(152円)をやや上回った。

在 庫 量

本年の在庫量は、3.7万トンと前年（3.5万トン）を若干上回った。

これは、輸入の減少があったものの国内生産量が前年並みであったが、消費がやや落ちていることを反映したものである。

消費地入荷量と価格

20年の東京消費地の入荷量は、生1.9万トン（前年2.1万トン）、冷0.4千トン（前年0.4千トン）であった。塩干物は1.1万トンで前年（1万トン）をやや上回った。

本年の1世帯あたりの消費支出は数量、金額とも前年をやや下回った。

価格は、生520円（前年485円）、冷406円（前年415円）、塩干457円（前年497円）で、生鮮が入荷減を反映し上昇したが、冷凍・塩干開きをは単価の下落がみられた。